

# 古墳と古墳時代の始まり

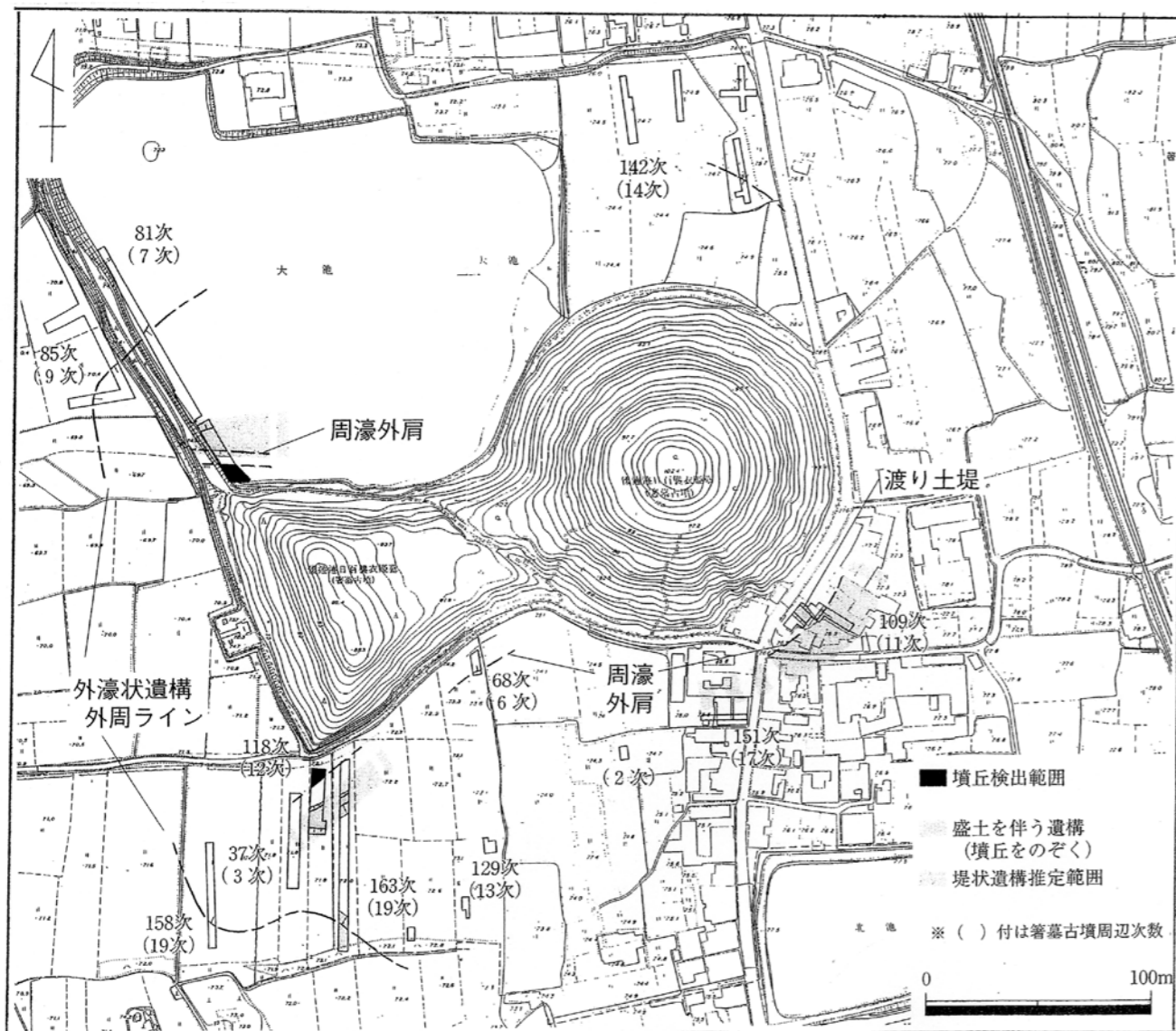
白石 太一郎

はじめに

1. ホケノ山から箸墓へ
2. 弥生時代の墳丘墓と古墳
3. 前方後円形墳丘墓と前方後方形墳丘墓
4. 東西の政治連合の合体とヤマト政権の成立

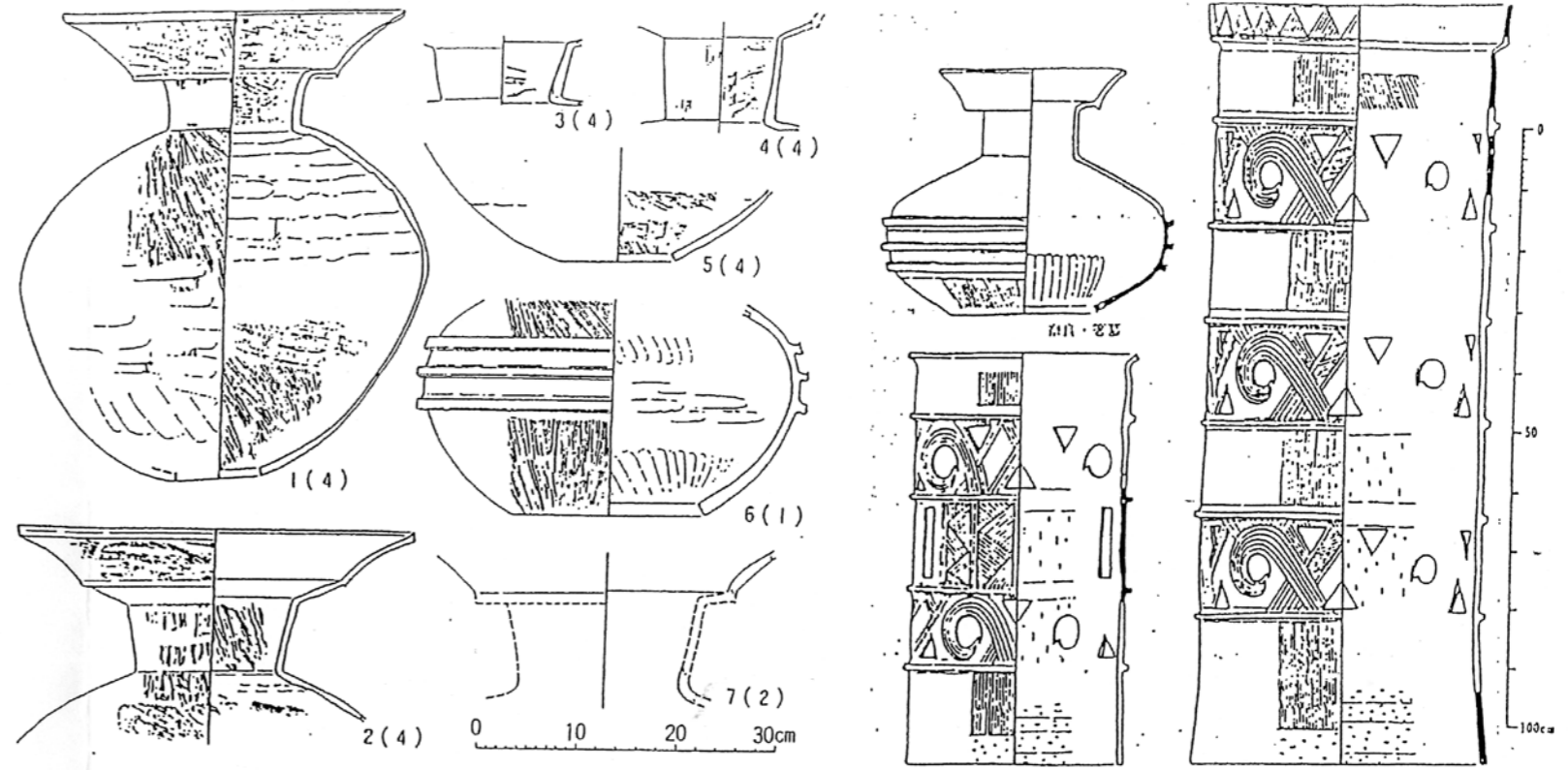
まとめ

## 《箸墓古墳》

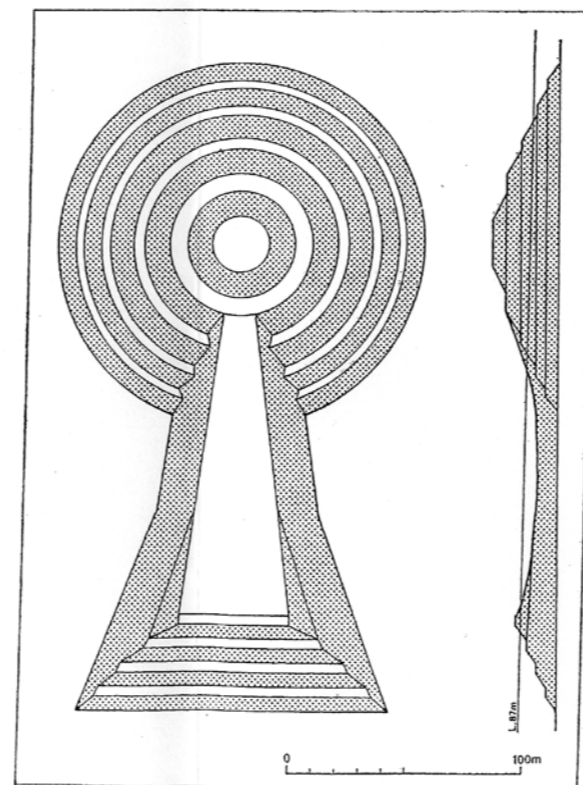


箸墓古墳周辺部の調査図 (2009年度の第163次調査まで)

[桜井市教育委員会『平成21年度国庫補助による発掘調査報告書』2011年]



箸墓古墳出土の土師器と特殊壺形・器台形埴輪



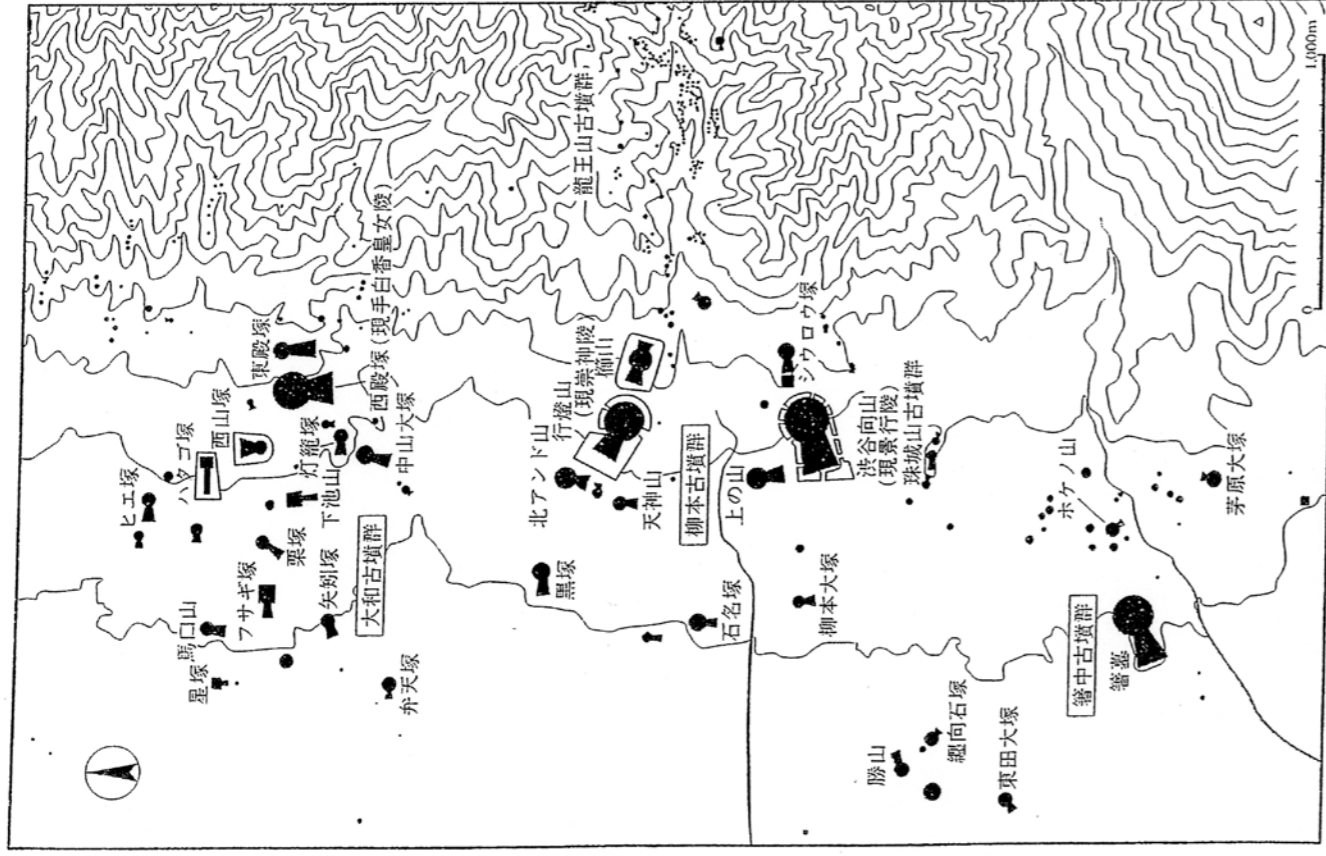
箸墓古墳墳丘復元図

『日本書紀』崇神天皇十年九月条

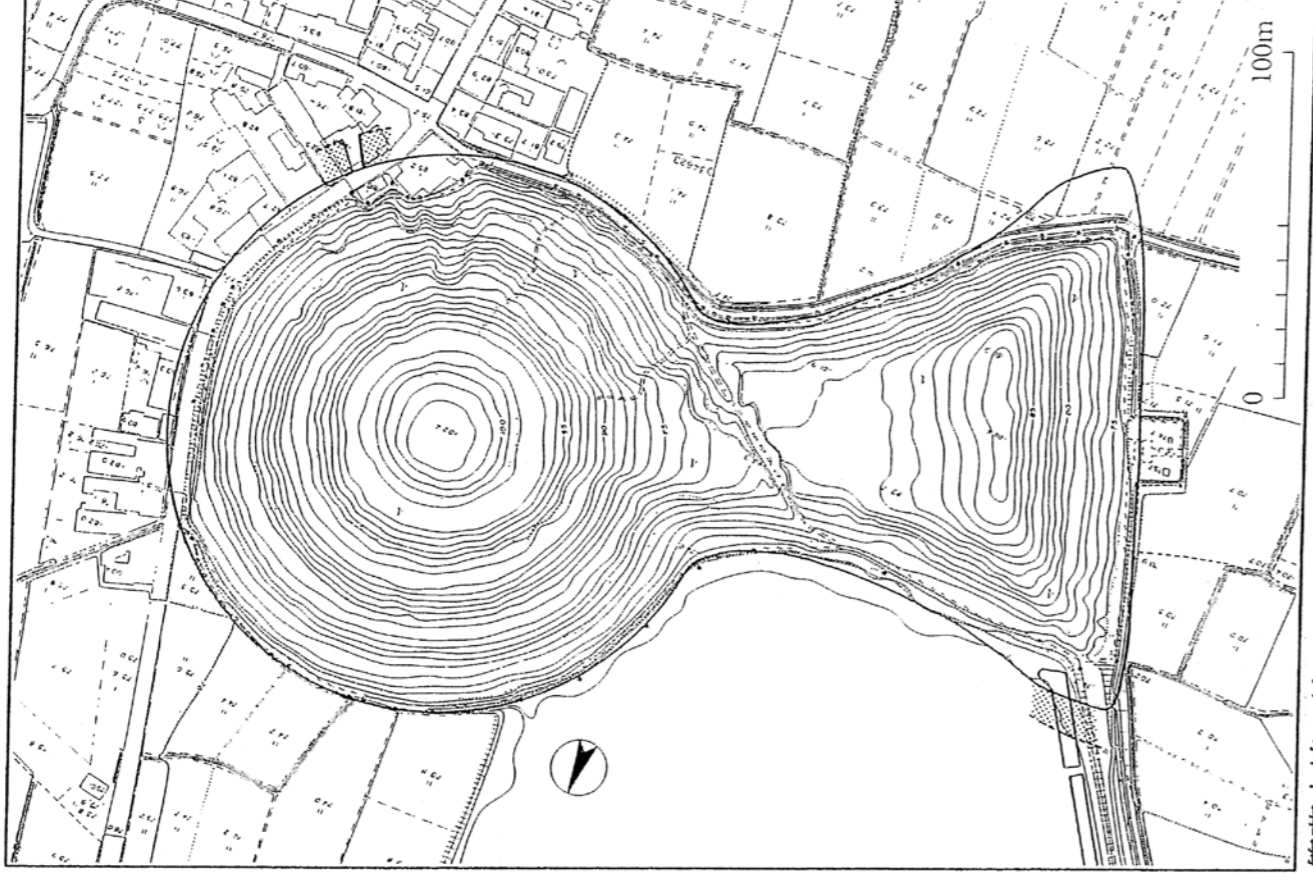
是の後に、倭迹迹日百襲姫命、大物主神の妻と爲る。然れども其の神常に晝は見えずして、夜のみ來す。倭迹迹姫命、夫に語りて曰はく、「君常に晝は見えたまはねば、分明に其の尊顔を視ること得ず。願はくは暫留りたまへ。明旦に、仰ぎて美麗しき威儀を觀たてまつらむと欲ふ」といふ。大神對へて曰はく、「言理灼然なり。吾明旦に汝が櫛篋に入りて居らむ。願はくは吾が形にな驚きましそ」とのたまふ。爰に倭迹迹姫命、心の裏に密に異ふ。明くるを待ちて櫛篋を見れば、遂に美麗しき小蛇有り。其の長さ大さ衣紐の如し。則ち驚きて叫啼ぶ。時に大神恥ぢて、忽に人の形と化りたまふ。其の妻に謂りて曰はく、「汝、忍びずして吾に差せつ。吾還りて汝に差せむ」とのたまふ。仍りて大虚を踐みて、御諸山に登ります。爰に倭迹迹姫命仰ぎ見て、悔いて急居。急居、此をば菟岐子と云ふ。則ち箸に陰を撞きて斃りましぬ。乃ち大市に葬りまつる。故、時人、其の墓を號けて、箸墓と謂ふ。是の墓は、日は人作り、夜は神作る。故、大坂山の石を運びて造る。則ち山より墓に至るまでに、人民相踵ぎて、手遞傳にして運ぶ。時人歌して曰はく、

大坂に 繼ぎ登れる 石群を 手遞傳に越さば 越しかてむかも

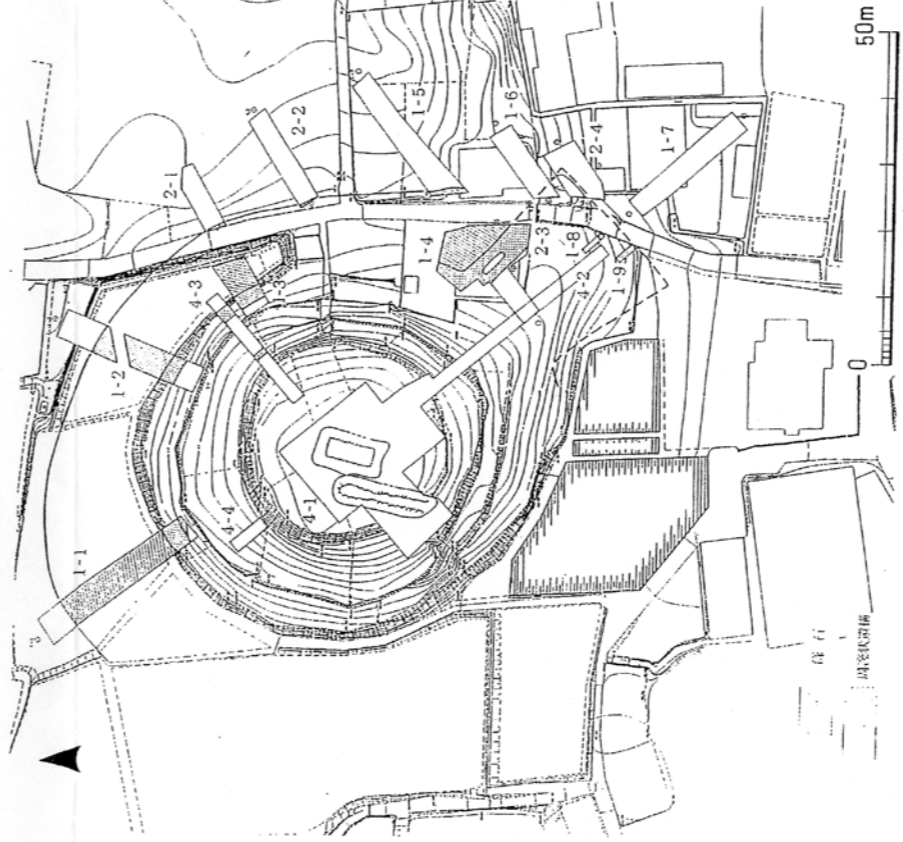
《ホケノ山墳丘墓》



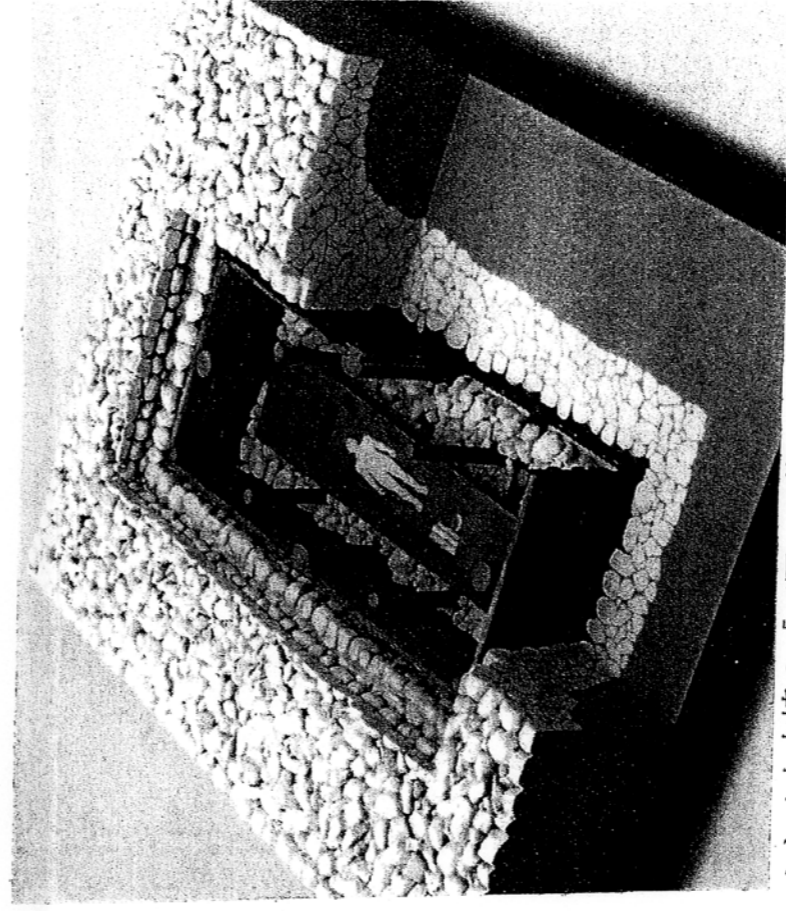
ホケノ山墳丘群古墳分布図



ホケノ山古墳の墳丘



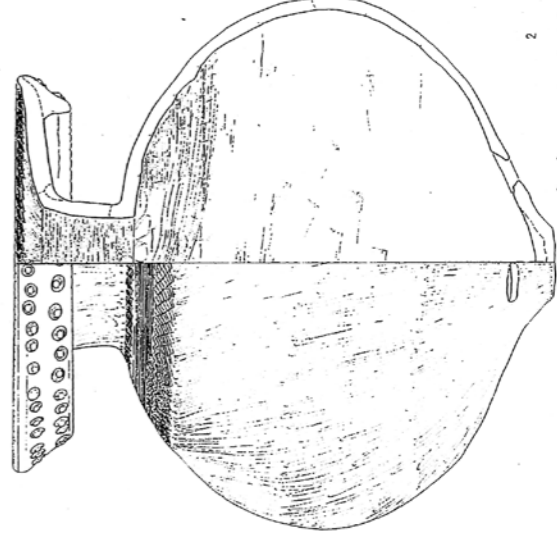
ホケノ山古墳の墳丘



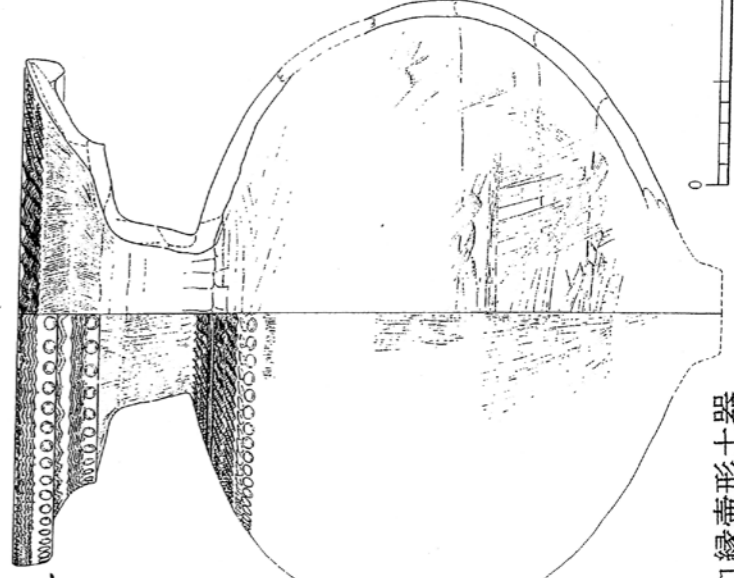
ホケノ山古墳の「石囲い石槨」



ホケノ山古墳の画文帯神獣鏡

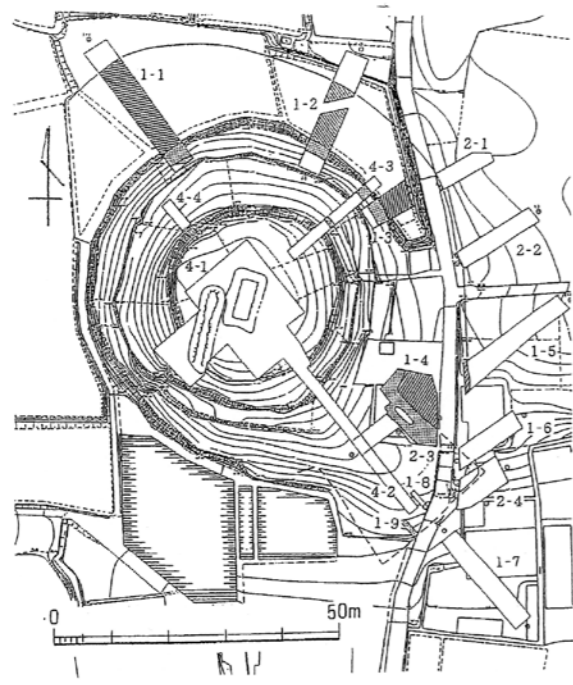


ホケノ山古墳の二重口縁壺形土器

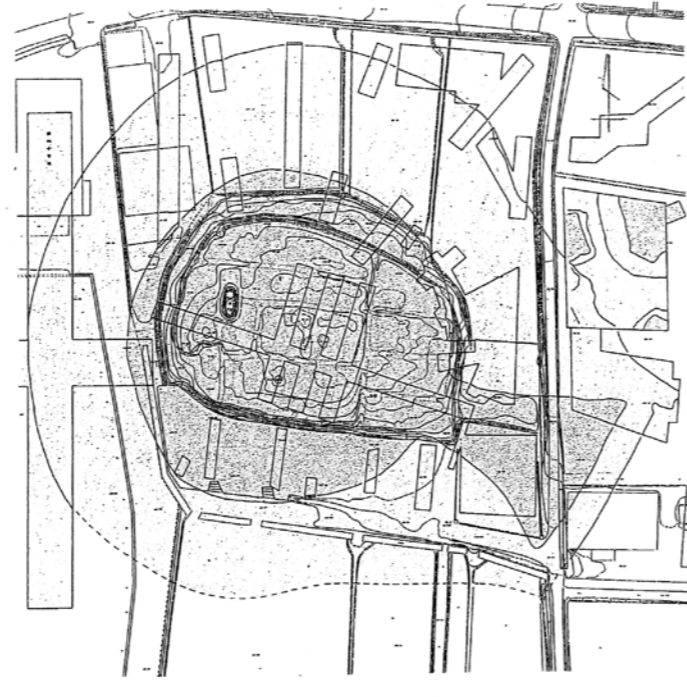


10cm

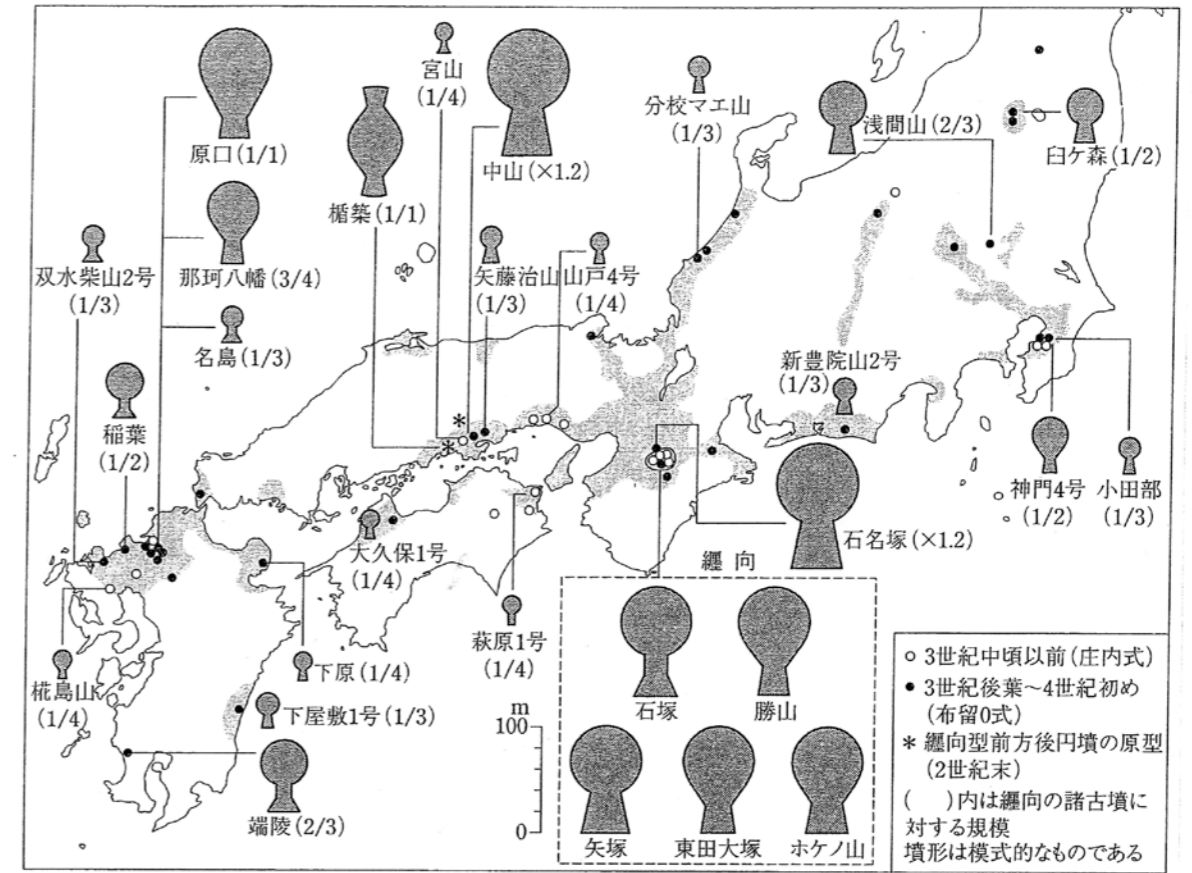
《前方後円形墳丘墓と前方後方形墳丘墓》



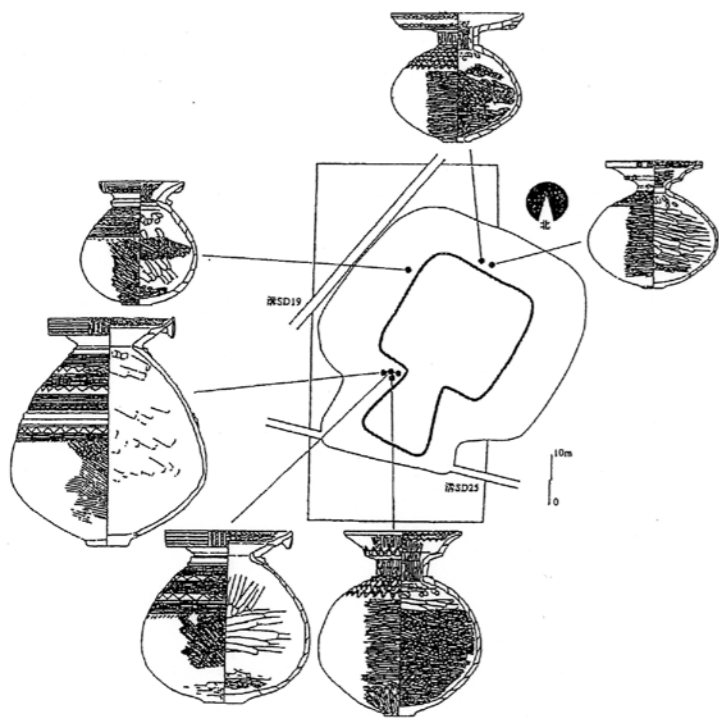
奈良県桜井市ホケノ山墳丘墓



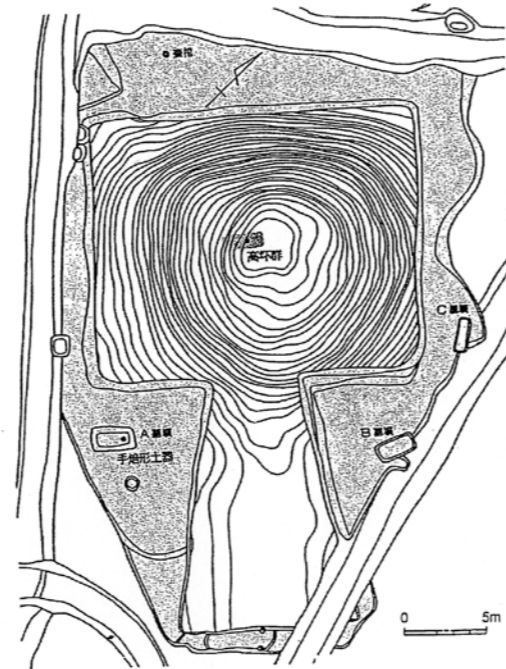
奈良県桜井市纏向石塚墳丘墓(1:1600)



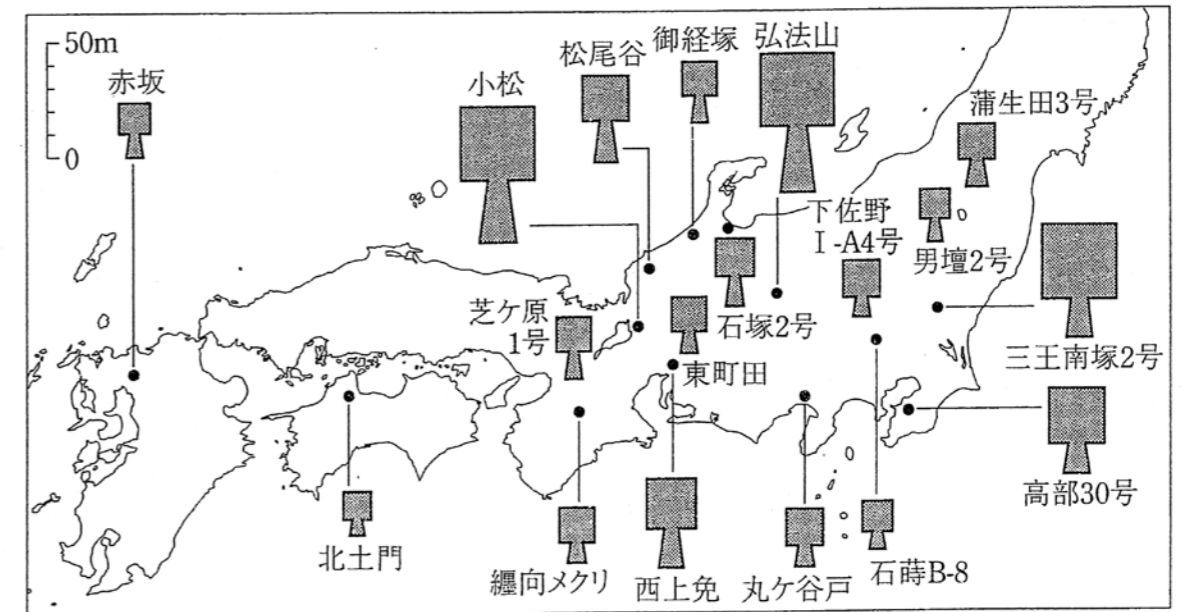
纏向型前方後円墳の分布 (寺沢 薫氏『王権誕生』2000年による)



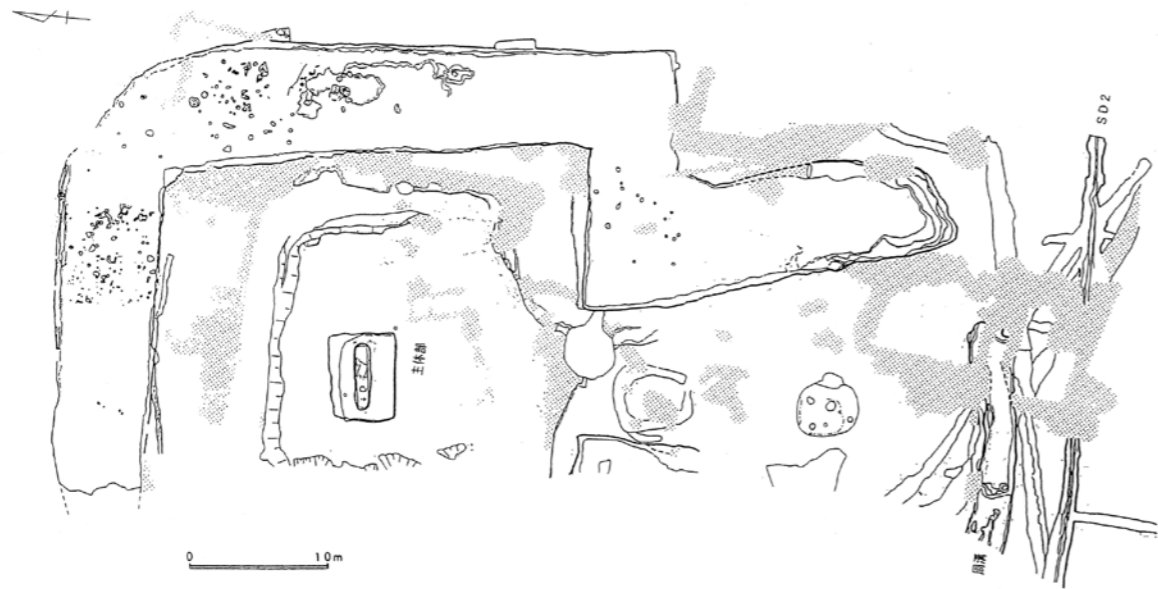
愛知県尾西市西上免遺跡の前方後方形墳丘墓



千葉県木更津市高部 32号墳丘墓



初期の前方後方墳の分布 (寺沢 薫氏『王権誕生』2000年による)



静岡県沼津市高尾山古墳 (沼津市教育委員会による)

三角縁神獸鏡の編年



第1段階 正始元年銘同向式神獸鏡(群馬県柴崎古墳)



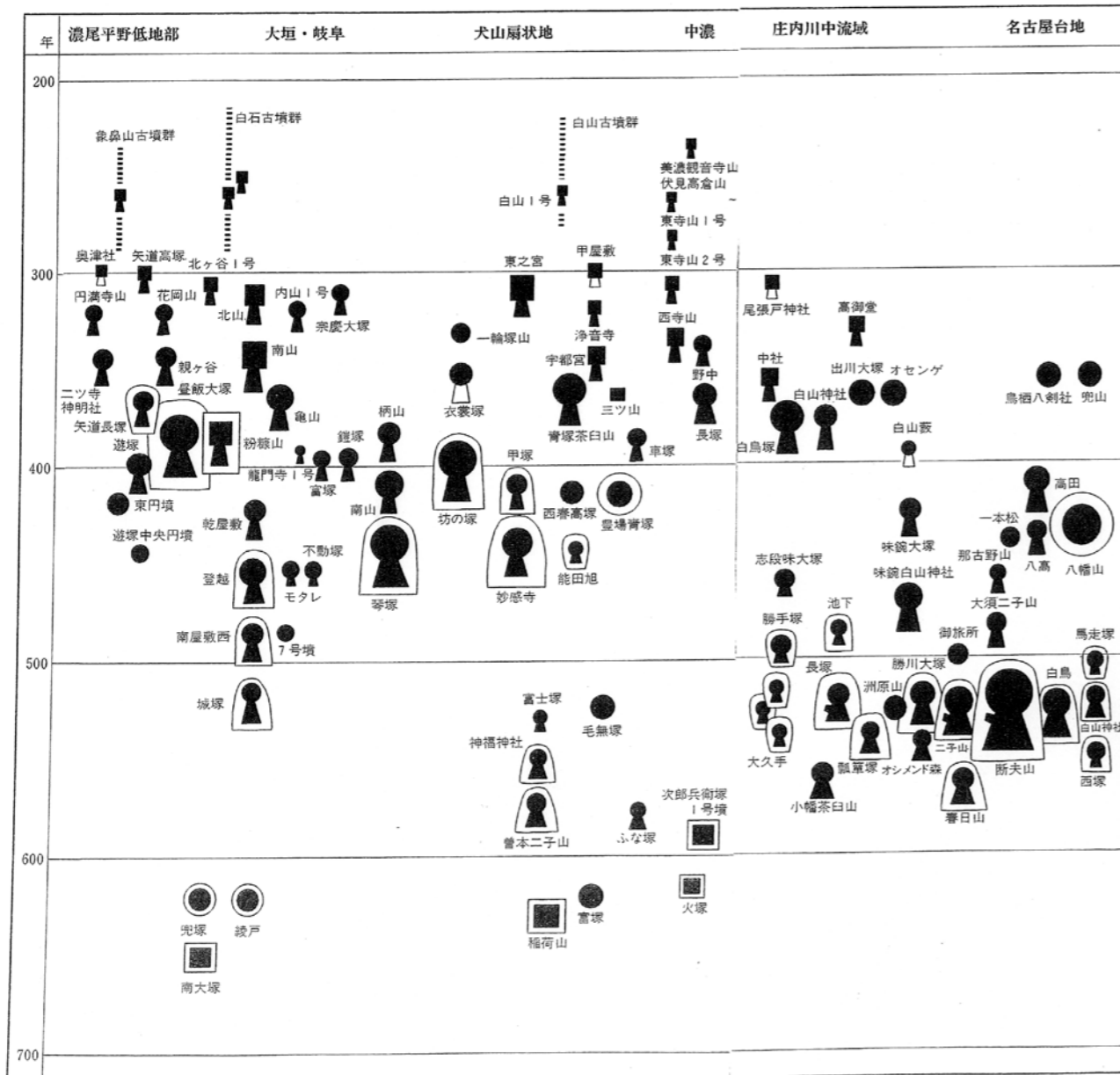
第4段階 波文帯三神三獸鏡(大分県亀ノ甲古墳)



第2段階 櫛齒文帯四神四獸鏡(京都府椿井大塚山古墳)



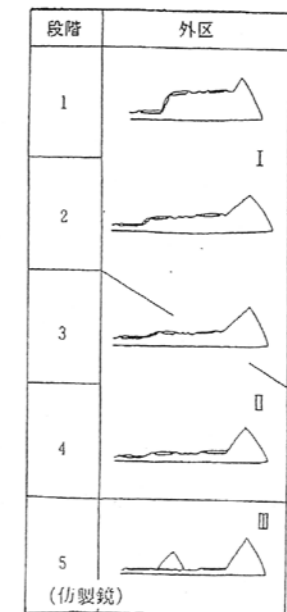
第5段階 獸文帯三神三獸鏡(佐賀県谷口古墳)



濃尾平野における古墳の編年 (赤塚次郎氏による)



第3段階 獸文帯四神四獸鏡(京都府椿井大塚山古墳)



三角縁神獸鏡の断面形の変遷 (新納 泉氏による)

『魏書』東夷伝倭人条 (魏志倭人伝)

— 國名・人名・官名に付けた振り仮名は仮のものである。

倭人は帯方の東南大海の中に在り、山島に依りて國邑を為す。旧は百余國、漢の時に朝見する者有り。今使訳通する所三十國なり。

邪國に到るには七千余里なり。那從り倭に至るには、海岸に循いて水行し、韓國を歴て、乍ち南し乍ち東す。其の北岸の狗邪國に到るには七千余里なり。

5 始めて一海を度ること千余里にして對馬國に至る。其の大官を卑狗と曰い、副を卑奴母離と曰う。居る所は絶島にして方四百余里可り。土地は山險にして深林多く、道路は禽鹿の徑の如し。千余戸有るも良田無く、海物を食いて自活し、船に乗りて南北に市糶す。又南に一海を渡ること千余里、名づけて瀚海と曰う、一支國に至る。官を亦卑狗と曰い、副を卑奴母離と曰う。方三百里可り。竹木、叢林多く、三千許りの家有り。差田地有り、田を耕すも猶食うに

10 足らず、亦南北に市糶す。又一海を渡ること千余里にして末盧國に至る。四千余戸有り、山海に浜いて居る。草木茂盛し行くに前人を見ず。好く魚鮫を捕え、水の深淺と無く皆沈没してこれを取る。東南に陸行すること五百里にして伊都國に到る。官を爾支と曰い、副を泄謨觚・柄渠觚と曰う。万余戸有り。世王有るも皆女王國に統屬す。那使の往来に常に駐まる所なり。東南して奴國に至るには百里。官を卑馬觚と曰い、副を卑奴母離と曰う。二万余戸有り。東行

15 して不弥國に至るには百里。官を多模と曰い、副を卑奴母離と曰う。千余家有り。南して投馬國に至るには水行二十日。官と弥弥と曰い、副を弥弥那利と曰う。五万余戸可りなり。南して邪馬台國と、女王の都する所に至るには、水行十日・陸行一月。官に伊支馬有り、次を弥馬升と曰い、次を弥馬獵支と曰い、次を奴佳麗と曰う。七万余戸可りなり。女王國自り以北は、其の戸數、道里略載を得べきも、其の余の諸國は遠絶にして詳を得べからず。

20 次に斯馬國有り。次に已百支國有り。次に伊邪國有り。次に都支國有り。次に弥奴國有り。次に好古都國有り。次に不呼國有り。次に姐奴國有り。次に對蘇國有り。次に蘇奴國有り。次に呼邑國有り。次に華奴蘇奴國有り。次に鬼國有り。次に為吾國有り。次に鬼奴國有り。次に邪馬國有り。次に躬臣國有り。次に巴利國有り。次に支惟國有り。次に烏奴國有り。次に奴國有り。此れ女王の境界の尽くる所なり。其の南に狗奴國有り。男子を王と為す。其の官に狗

25 古智卑狗有り。女王に屬さず。那自り女王國に至るには万二千余里なり。男子は大小と無く皆黥面文身す。古自り以來、其の使い中國に詣るに、皆自ら大夫と稱す。夏后の少康の子会稽に封せられ、斷髮・文身し以て蛟竜の害を避く。今倭の水人好く沈没して魚蛤を捕え、文身し亦以て大魚・水禽を厭う。後稍以て飾りと爲る。諸國の文身各異なり、或は左に或は右に、或は大きく或は小さく、尊卑差有り。其の道里を計るに當に会稽の東治

30 (6)の東に在るべし。其の風俗は淫らならず。男子は皆露紵し、木屨を以て頭を招す。其の衣は襜褕、但結束して相連ね、略縫うこと無し。婦人は被髮屈紵し、衣を作ることも被の如く、其の中央を穿ち頭を貫きてこれを衣る。禾稻・紵麻を種え、蚕桑・績績し細紵・織・縠を出だす。其の地に牛・馬・

35 虎・豹・羊・鵠無し。兵には矛・楯・木弓を用う。木弓は下を短く上を長くし、竹箭は或は鉄或は骨鐵なり。有無する所は儋耳・朱崖と同じ。倭の地は溫暖にして、冬夏生菜を食い、皆徒跣なり。屋室有り、父母・兄弟臥息處を異にす。朱丹を以て其の身体を塗ること、中國の粉を用うるが如きなり。食欲には蠶豆を用いて手

40 肉を食わず、喪主は哭泣し他人は就きて歌舞・飲酒す。已に葬れば家を祭げて水中に詣り沐浴し、以て練沐の如くす。其の行來は、渡海して中國に詣るに、恒に一人をして、頭を梳らず、蠟蟲を去らず、衣服を垢汚せしめ、肉を食わず、婦人を近づけず、喪人の如くせしむ。これを名づけて持衰と爲す。若し行く者吉善なれば共に其の生口・財物を願ゆ。若し疾病有り、暴害に遭わば、便ちこれを殺さんと欲す。謂えらく其の持衰誼ますと。真珠・青玉を出だす。其の

45 山に丹有り。其の木に柑・杼・子杼・椶櫚・投擲・烏号・楓香有り。其の竹は篠・箨・桃支・蘆・楸・楓・藜荷有るも以て滋味と爲すを知らず。獺・熊・黑雉有り。其の俗、拳事・行來、云爲する所有らば、軀ち骨を灼きて卜し、以て吉凶を占う。先ず卜する所を告ぐ。其の辭は令

他法の如く、火疵を視て兆を占う。其の会同には、坐起は父子・男女の別無く、人の性酒を嗜む。大人を見て敬む所は、但手を搏ち以て跪拜に當つ。其の人は養考にして、或は百年或は

50 八、九十年なり。其の俗、國の大人は皆四、五婦・下戸も或は二、三婦なるも、婦人は淫らならず、妬忌せず。盜竊せず、讞訟少なし。其の法を犯すや、輕き者は其の妻子を没し、重き者は其の門戸を没し、宗族に及ぼす。尊卑各差序有りて相臣服するに足る。和賦を収むに厭

55 有り。國國に市有り、有無を交易し、大倭をしてこれを監せしむ。女王國自り以北には特に一大率を置きて檢察す。諸國これを畏懼す。常に伊都國に治し、國中に於て刺史の如き有り。王の遣使、京都・帶方郡・諸國に詣り、及び那の倭國に使いするや、皆津に臨みて授受し、文書・賜遺の物を伝送して女王に詣らしむに差錯するを得ず。下戸、大人と道路に相逢えば逡巡して草に入り、辭を伝え事を説くには、或は跪り或は跪き、両手は地に拠り、これが恭敬を爲す。対応の声を嚙と曰う。比するに然諾の如し。其の國、本亦男子を以て王と爲す。住

60 まること七、八十年にして倭國亂れ、相攻伐して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と爲し、名づけて卑弥呼と曰う。鬼道を事とし能く衆を惑わす。年已に長大なるも夫婿無く、男弟有りて國を治むを佐く。王と爲りし自り以來、見ることに有る者少なし。婢千人を以て自ら侍せしめ、唯男子一人有りて飲食を給し、辭を伝えて出入りす。居る處の宮室は樓觀・城柵を嚴かに設け、常に人有りて兵を持して守衛す。女王國の東、海を渡ること千余里、復た國有り、皆倭の種なり。又侏儒國有りて其の南に在

65 り、人の長は三、四尺。女王を去ること四千余里なり。又裸國・黑齒國有りて復た其の東南に在り、船行一年にして至る可し。參問するに、倭の地は海中洲島の上に絶在す。或は絶え或は連なり、周旋すること五千余里可りなり。

景初三年(263)六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わして郡に詣り、天子に詣りて朝獻せんことを求めしむ。太守劉夏、吏を遣わし將い送りて京都に詣らしむ。其の年十二月、詔書して倭の女王に報いて曰わく、「親魏倭王卑弥呼に制詔す。帯方太守劉夏、使いを遣わし、汝の大夫難

70 升米、次使都市牛利を送り、汝獻する所の男生口四人・女生口六人・班布二匹二丈を奉じ以て到らしむ。汝の在る所論かに遠きも、乃ち使いを遣わして貢獻す。是れ汝の忠孝、我甚だ汝を哀しむ。今汝を以て親魏倭王と爲し、金印紫綬を假す。裝封し帯方太守に付して假授す。汝其の種人を經撫し、勉めて孝順を爲せ。汝の來使難升米・牛利、遠きを涉り道路に勤勞す。今難

75 升米を以て率善中郎將と爲し、牛利を率善校尉と爲し、銀印青綬を假し、引見勞賜して遣わし還す。今絳地交竜の錦五匹、絳地縹粟の罽十張、青絳五十匹、紺青五十匹を以て、汝獻する所の貢直に答う。又特に汝に紺地句文的錦三匹、細班の華麗五張、白絹五十匹、金八兩、五尺刀二口、銅鏡百枚、真珠、鉛丹各五十斤を賜う。皆裝封し難升米・牛利に付す。還り到らば

80 録受し、悉く以て汝國中の人に示し、國家汝を哀しむを知らしむべし。故に卿重に汝に好き物を賜うなり。正始元年、太守弓遵、建忠校尉楊柳等を遣わし、詔書・印綬を奉じて倭國に詣り、倭王に拜假し、并せて詔を齎し金・帛・錦・罽・刀・鏡・采物を賜わらしむ。倭王使いに囚りて上表し、詔恩を答謝す。其の四年、倭王復た使い大夫伊聲耆・掖邪狗等八人を遣わし、生口、倭錦、絳青の織・織衣、

85 帛布、丹、木射(2)の短弓、矢を上獻す。掖邪狗等、皆に率善中郎將の印綬を拜す。其の六年、詔して倭の難升米に黃纁を賜い、郡に付して假授せしむ。其の八年、太守王順官に到る。倭の女王卑弥呼、狗奴國の男王卑弥呼と素より和せず。倭の載斯烏越等を遣わして郡に詣り、相攻撃する状を説かしむ。丞曹の掾史の張政等を遣わし、囚りて詔書・黃纁を齎して難升米に拜假し、檄を爲りてこれを告諭す。卑弥呼以て死す。大いに家を作ることを徑百余步、

90 葬に殉する者奴婢百余人なり。更に男王を立てしも國中服さず。更に相誅殺し當時殺すもの千余人なり。復た卑弥呼の宗女の台与(2)・年十三なるを立てて王と爲し、國中遂に定まる。政等、檄を以て台与を告諭す。台与、倭の大夫率善中郎將の掖邪狗等二十人を遣わし、政等の還るを送らしむ。囚りて台に詣り、男女生口三十人を獻上し、白珠五十孔、青の大句珠二枚、異文の雜錦二十匹を貢す。